様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４４２０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2022
課題番号：１５Ｋ０２０９３

研究課題名（和文）近代大阪の在野儒学者の研究―その経学と社会政治活動―

研究課題名（英文）Research Conducted by Independent Confucian Scholars of Modern Osaka: Focusing on their Classical Chinese Scholarship as well as their Social and Political Activities

研究代表者
矢羽野　隆男（Yahano, Takao）

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：８０２４８０４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：近代大阪の在野儒学者である山本梅崖・西村天囚の経学の特徴を明らかにした。梅崖は『論語私見』を著わし、「性」「仁」に自由権・抵抗権を読み取るなど、西洋思想を融合した近代的経学を構築した。天囚は、日中の諸説を基礎に、清朝学術の影響も受けつつ、伝統経学と近代学術との特徴を併せ持つ『論語集釈』を執筆した。
また在野儒学者の連携による儒教振興活動を明らかにした。例えば、藤澤南岳が設立した大成会に、梅崖が参加して活動が伸展し、講演、雑誌、学校、海外連携、釈奠の催行等の事業が図られたこと、江戸期大坂の漢学拠点であった懐徳堂の再建に南岳らが関心を寄せ協力したこと等である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来「儒学における西洋学の受容」の研究対象は、洋学者や帝国大学など近代教育の中で活動した学者が主であった。本研究は、近代大阪を代表する在野儒学者である藤澤南岳、山本梅崖、西村天囚らを対象に、その経学の特徴（特に西洋思想や近代学術の受容）を明らかにした。また、在阪の在野儒学者が連携して活動団体を設立し、急速に西洋化が進む時代に儒教に基づく教育・社会・政治活動を展開したことを明らかにした。
近代大阪の在野の儒学者の経学およびその社会政治活動の解明により、近代の思想史の空白を補い、その営為を思想史上に位置づけた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the features of the keigaku of Yamamoto Baigai and Nishimura Tenshu, two independent Confucian scholars based in Osaka during the modern period. In his work The Analects of Confucius: A Personal View, Baigai developed a theory of civil liberties and the right to resist. He was able to construct a modern style keigaku by fusing western philosophical thought with traditional Confucian concepts. Tenshu;, influenced by Qing period scholarship combined both traditional and modern scholarship in his Collected Interpretations of the Analects of Confucius.
The Confucianism revival movement was also investigated by examining cooperation between independent Confucian scholars. An example of this cooperation can be seen in the activities of the Taiseikai society founded by Fujisawa Nangaku. After Baigai joined the Taiseikai, their activities expanded into public speaking, publishing, as well as the holding of ceremonial rites for the commemoration of Confucius.

研究分野：中国哲学　日本漢学

キーワード：山本梅崖　論語　藤澤南岳　泊園書院　西村天囚　懐徳堂　大成会　釈奠

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

儒学における洋学の受容は、主に儒学の素養の上に蘭学や英学を修めた 「洋学者」が対象とされてきた。例えば、中村正直・西周らである。いっぽう明治期の儒学者に注目した研究では、主な対象は重野成斎・井上哲次郎・内藤湖南ら官学の学者である。在野の儒学者は近代思想史では対象外に置かれ、儒学者の本領である経学に西洋学の受容を読みとる研究は稀であった。

本研究では取り上げる藤澤南岳（1843‐1920）、山本梅崖（1852‐1928）、西村天囚（1865‐1924）は、近代の大阪で、官僚や官立学校などに身を置かず、私塾など民間の教育機関に拠って活動した屈指の儒学者で、社会政治の方面でも政府要路へ積極的に発言した人物であるが、十分な研究の蓄積があるとは言い難い。

藤澤南岳は、東京の三島中洲とならぶ碩学であるが、その社会的な方面での活動意義は十分には明らかにされていない。また『論語彙纂』『中庸家説』『増補蘇批孟子』など南岳の経学上の主著に対する研究は手付かずであった。

山本梅崖は、自由民権運動に参加し大阪事件にも連座した反骨の儒学者で、自由民権家として注目され、また梅崖と清末の変法派知識人（汪康年・梁啓超ら）との書翰や首相への提言が呂順長氏によって発掘され、歴史分野では研究の進展を見つつある。思想史分野ではその儒学の特徴を指摘するものの、梅崖の主著『論語私見』への考察はなく、経学に対する正面からの研究が待たれるところである。

西村天囚は東京大学古典講習科で重野安繹の薫陶を受けた後、朝日新聞社記者を経て、財団法人懐徳堂の教授となった人物である。懐徳堂復興における主導的な役割等については湯浅邦弘氏・竹田健二氏らによって新事実が明らかにされつつあったが、天囚の学術・思想についてはほとんど研究がない状況であった。

２．研究の目的

本研究は、近代の大阪で在野の儒学者として活躍した泊園書院の藤澤南岳や梅清処塾の山本梅崖、重建懐徳堂の西村天囚らに着目し、〈経学と西洋学受容〉〈清末知識人・中国人日本留学生との交流記録〉〈政府要路への意見書〉〈雑誌・新聞等に所載の時事論や詩文〉等の考察により、彼らがいかに儒学を近代化し社会政治上の活動を展開したかを解明し、その思想的史的意義を探究するものである。

申請者は先に泊園書院（藤澤東ガイ、南岳）の『大学』解釈が近代国家の国民像に経学的な根拠を与えたことを指摘したが、同じく泊園書院の『中庸』解釈や、梅崖の主著『論語私見』、天囚の『論語』に関する学術思想にも、近代の社会・国家を支える理念や追求した価値を見出せることを示そうとした。

また、南岳が当時の教育に対して行った提言や実践、梅崖と清朝変法派士人との交流・連携や自由民権をめざした活動、天囚の清末知識人（張之洞・張謇ら）との交流など、彼らが学術研究以外で展開した社会政治の方面における活動を明らかにしようとした。

経学および社会政治の両面からの考察を行い、彼らのアジア主義・自由民権思想・国家国民観など近代思想史上の意義を探究することを目的とした。

３．研究の方法

当初は、日本漢学の申請者（矢羽野隆男）と近代日中交流史の研究分担者（呂順長）の 2 名とに共同研究で、研究内容はそれぞれの専門分野に即して次のように分担する計画であった。

Ａ 南岳・梅崖らの経学および西洋学受容に関する思想史的考察（主に矢羽野隆男）

Ｂ 南岳・梅崖らの社会政治上の活動およびその思想史的考察（主に呂順長）

しかし、令和 28（2016）年度に呂氏が中国の大学に赴任したため、研究分担者から外れることとなった。Ａ・Ｂの各分野の研究方法の概略は次のとおりである。

≪Ａ 経学・西洋学受容分野≫

（1）山本梅崖の経学研究について、主著『論語私見』を精読し、梅崖の儒学観および『論語』解釈を抽出し、読解を定着させるために訳注を作成した上で、自由民権など西洋思想と儒学思想の関係に注意して論文を作成する。

（2）藤澤南岳の経学研究について、泊園書院の主要文献『中庸家説』を南岳の口述筆記『中庸講義』を参照しつつ精読し、読解を定着させるために訳注を作成した上で、『中庸』解釈の思想史的な意義を考察し論文を作成する。これには西洋学受容とともに泊園書院の重要思想「政教一致」「天人参賛」に注意する。ただし、レジェミー・ウッド氏の研究成果「泊園書院の『中庸』学について」（『文化交渉』第 6 号、2016 年）が主要な点を解明したことにより、計画を繰り下げた。

（3）西村天囚の『論語』研究の研究ノートといえる〈『論語後案』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵）への天囚書入れ〉を分析し、天囚の『論語』解釈を抽出し、天囚の『論語』説および西洋学との関わりを考察して論文を作成する。ただし、天囚の『論語』研究の成果でありながら所在不明であった『論語集釈』が平成 29 年（2017）に発見され、令和 3（2021）年に複写が利用できることとなったため、計画を繰り上げた。

≪Ｂ 社会政治分野≫

（1）山本梅崖の社会政治上の活動について、『嚶嚶會誌』（梅清処塾機関誌）所収の時事論や時勢に関する詩文、

書翰、新聞記事などこれまで活用されなかった資料を収集し資料集を作成する。また、山本梅崖と変法派知識人との交流記録に見える活動・発言、大隈重信・伊藤博文ら首相への意見書にみえる対清・対露観も考え併せ、梅崖の時事意識およびその根底にある思想を考察し、東アジア近代思想史の観点から論文を作成する。
（2）南岳の社会政治上の活動について、『弘道新説』（泊園書院 月刊誌 1887‐89 年）、『教育博議』（日本弘道会 月刊誌 1895‐29）等に所収の記事および時事に関する詩文の解読結果をもとに、資料集を作成し、政府への意見書に見える教育観なども考え併せ、南岳の時事意識やその根底にある思想を考察し、思想史の観点から論文を作成する。
（3）西村天囚の社会政治活動については、清末知識人（張之洞・張謇ら）との交流記録や『天囚詩文草稿』所収の時事に関する詩文などの収集・解読を行い、その社会政治上の活動を思想史的な観点から考察し、論文を作成する。

４．研究成果
（1）《A1》山本梅崖の経学研究
山本梅崖の主著『論語私見』に基づき、儒学の主要概念である「仁」についての梅崖の解釈を検討した。儒学を個人道徳に矮小化したとして朱子学を批判し（徂徠説に拠らず朱子学的傾向を示す部分もあるが）、儒学を政治学とする徂徠学の立場に立つ梅崖は、「仁」を社会政治における行動原理とする（『論語私見』所収「論語卮言」）。『梅清處文鈔』所収「自由解」「自由郷記」においては、梅崖の自由民権思想と儒教とが接合され、自由・民権を実現するには儒教の仁が行動原理として有効であるとする、社会政治における仁の実践的な性格が確認できた。また梅崖の主著『論語私見』における「仁」解釈を考察し、政治・社会における行動・実践を強調する、一種「抵抗権」にも通じる梅崖の「仁」は、『論語』や『孟子』に基づく経学的な営為の帰結であることを明らかにした。梅崖の儒学は、西洋の自由・自主といった概念を解説するために儒学経典の一節を援用するというような、西洋近代思想の補助的な役割にとどまるものではなく、西洋近代思想と結びつき、それを吸収融合して生み出された近代的な儒学であったことを提示した。（矢羽野「山本梅崖の自由民権と儒教観―清末変法派との交流を手掛かりに―」第 3 章・第 4 章、2019 年）

（2）《A3》西村天囚の経学研究
天囚の『論語』研究の成果である『論語集釈』は、研究ノート代わりに黄式三（1789－1862）の『論語後案』を基礎テキストとして書入れを行った。『論語後案』の特徴は漢学と宋学を兼修し考証学を応用する点にあり、これが「詞章・義理（宋学）・考拠（考証）」の総合を旨とする桐城派を奉じた天囚の学問観と合致したもの考えられる。日本での桐城派の受容は、明治 10 年以降の清国外交官の来日と交流によって深められたが、とりわけ重野安繹（1827－1910）は強い影響を受け「経義・考据・文章」を重視する姚鼐の主張に賛同した。東京大学文学部古典講習科で重野の薫陶を受けた天囚は、桐城派の学問観を継承した。
天囚の桐城派への傾倒は、桐城派の方東樹の『漢学商兌』を愛読したことにも窺える。『漢学商兌』は、現実世界とは没交渉に古典研究に沈潜する漢学（考証学）に対し、理学派（朱子学）の立場から発した痛烈な批判であった。時勢への危機感から生まれた方東樹『漢学商兌』は、張之洞・劉坤一ら清朝高官と交流して日清関係の改善や清朝支援に尽し、重建懐徳堂の設立により儒教の振興を図った天囚の実践的な学問観と通じる。
日本漢学史において、天囚は考証を重んずる実証的な近代研究の基盤を形成した世代に位置づけられるが、『論語集釈』の考察から、一方で聖賢の教えを尊崇し、その教えを自ら体現し、かつ社会道義を回復するといった主体的で実践的な伝統的学問観（いわば経学的学問観）を併せ持っていたことを提示した。（矢羽野「西村天囚『論語集釈』と『論語後案』書入れと」2023 年）。

（3）《B1》山本梅崖の社会政治上の活動
南岳等と共に儒学に基づく社会活動を展開した梅崖は、明治 30 年（1897）約 70 日間にわたる清国旅行に出た。『燕山楚水紀遊』（明治 31 年 7 月）は梅崖による旅行記である。旅の目的は、A 清国の聖廟・釈奠儀礼の実地調査、B 学者による中国の実態調査、C 西洋に対する日清提携の必要性の 3 点であった。時は戊戌維新の前年に当り、上海で汪康年・羅振玉・張謇といった変法派の士人らと交流し、西洋列強への危機感、儒教への尊崇という共通基盤に立ち、政治・社会の変革について意見を交わした。『紀遊』の対話記録から、経世済民の教えである儒教こそ、現実の政治・社会の変革に必要な精神であり、それを体現した儒学者たちによる、専制に対抗して正義を貫く不屈の行動こそが、政治・社会の近代化にも必要だとする梅崖の儒教認識を確認した。この時の交流が、後の梅崖による留学生受入れ、日本亡命の変法派士人への支援につながった。（矢羽野「山本梅崖の自由民権思想と儒教－清末変法派との交流を手掛かりに－」第 1 章、2019 年）

（4）《B1》山本梅崖の社会政治上の活動
清末変法維新派の士人（康有儀、梁啓超、康有為、王照、徐勤ら）が山本梅崖へ送った書簡（高知市立自由民権記念館蔵）を翻刻して注釈と解説を付し、呂順長著『清末維新派人物致山本憲書札考釈』にまとめた。書簡の解読・考察から以下の点が明らかとなった。
1．明治 30 年（1897）の中国旅行を契機に、梅崖は汪康年・梁啓超ら士人と交流し、梅清處塾に少なからずの中国人留学生を受け入れ、康有為ら変法維新派の日本亡命を援助し、中国の文人士人らの日本理解に対し大

きな作用を果たした。2．梁啓超の翻訳とされていた中国最初の漢訳政治小説『佳人奇遇』は、梅清處塾で学んだ康有儀（康有為の従兄）の翻訳であった。3．梅崖らが幹事を務めた日清協和会が日本政府に対し変法維新派の日本亡命の援助を求めたことについて、梁啓超は感謝するとともに、援助が期待できる日本の有力者の名簿の提供を求めるなど、康有為・梁啓超などの日本亡命後の活動に影響があった。（呂順長『清末維新派人物致山本憲書札考釈』2017 年）

《B1・2》山本梅崖・藤澤南岳の社会政治上の活動

南岳・梅崖の交流は、南岳の父東畧（南岳の父 1794－1864）と梅崖の伯父竹園（1819－1889）との同学派（徂徠学派）間の交流に遡る。（矢羽野「山本竹園・竹渓墓誌銘訳注―近代大阪における儒学者の交流一斑―」2017 年）

明治政府の欧化主義に反発し、それに対抗して国粋主義・アジア主義の思潮が広がる中、明治 20 年 6 月、南岳は儒教振興を目的とする団体「大成会」を設立し、機関紙『弘道新説』を創刊した。翌年には大阪事件による服役から復帰した山本憲も加わり（『弘道新説』第 19 号所載の南岳「時ノ宜シキヲ得ベキヲ論ズ」による）、新規約を策定して〈講演会・雑誌・学校・著作〉のほか〈海外の学者との連携〉〈春秋の釈奠催行〉を行うなど事業を拡大した。

明治 21 年 3 月 17 日、南岳は会員と謀り泊園書院で釈奠を催行した。同 36 年 3 月 31 日には土師神社（現在の道明寺天満宮）で、藤澤家と南坊城同社宮司・岡田松窓（ともに大成会員）ら地元有志とが組織した「釈奠会」により第 1 回釈奠を催行した（2023 年現在で第 120 回）。他の大成会の会員も別に釈奠を行い、梅崖は明治 22 年、南岳の弟子の越智宣哲（1867－1941）も明治 25 年に開始した。梅崖は釈奠に孔子紀元（生年紀元）を使用したが、康有為が「強学報」（1895 年）に孔子紀元（卒年紀元）を用いたのに 6 年先立つ。儒学を基礎に近代化を目指した両者の共通性を象徴する。（矢羽野「大成会の釈奠―藤澤南岳と山本梅崖と―」、2017 年）

これまで南岳・梅崖等が開催した「聖教講談の会」については、『弘道新説』に記録がなく未詳であったが、「東雲新聞」所載の「儒教講談会」の記事により具体的な内容が明らかとなった。「東雲新聞」は明治 21 年（1888）1 月 15 日発刊で、中江兆民を主筆、植木枝盛らの記者を擁し、「自主自由の通義に因り尊王愛国の精神を発揚する」（第一号「社告」）と謳う自由民権派の新聞で、梅崖も同 23 年 9 月から 11 月に主筆を務めた。また同紙の漢詩文欄は、主筆の兆民も自作を掲載して南岳ら大家の投稿を促すなど力を注いだが、逍遥遊社など大阪の漢詩結社の社友が頻出し、また南岳の泊園書院、近藤南州の猶興書院での詩会も連載するなど、当時の大阪の漢学者の活動記録としても価値がある。（矢羽野「『東雲新聞』にみる在野儒学者の活動―山本梅崖・藤沢南岳の講演・漢詩文について―」2019 年、「矢羽野「河内漢詩漢文名所」研究―漢詩篇（一）―」2020 年）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 矢羽野隆男	４．巻 14
２．論文標題 西村天囚『論語集釈』と『論語後案』書入れと	５．発行年 2023年
３．雑誌名 懐徳堂研究	６．最初と最後の頁 69- 87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢羽野隆男	４．巻 9
２．論文標題 「河内漢詩漢文名所」研究―漢詩篇（一）―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 四天王寺大学 教育研究実践論集	６．最初と最後の頁 一―十九
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢羽野隆男	４．巻 李号（65）
２．論文標題 山本梅崖の自由民権思想と儒教―;清末変法派との交流を手掛かりに―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『中国研究集刊』	６．最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/76122	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢羽野隆男	４．巻 関西大学東西学術研究所研究叢刊 56
２．論文標題 大成会の釈奠―藤澤南岳と山本梅崖と―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈』(関西大学東西学術研究所研究叢刊 56)	６．最初と最後の頁 47-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢羽野隆男	4．巻 63
2．論文標題 山本竹園・竹渓墓誌銘訳注―近代大阪における儒学者の交流一斑―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 四天王寺大学紀要	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 矢羽野隆男	4．巻 印刷中
2．論文標題 大成会の釈奠―藤沢南岳と山本梅崖と―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 泊園書院シンポジウム論文集（仮）	6．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 呂順長	4．巻 60
2．論文標題 康有儀の山本憲に宛てた書翰（訳注・その三）	5．発行年 2015年
3．雑誌名 四天王寺大学紀要	6．最初と最後の頁 359-378
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 呂順長	4．巻 5
2．論文標題 日本新近発現康有儀書札選注	5．発行年 2015年
3．雑誌名 文献	6．最初と最後の頁 136-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 矢羽野隆男	４．巻 68
２．論文標題 『東雲新聞』にみる在野儒学者の活動―山本梅崖・藤沢南岳の講演・漢詩文について―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 四天王寺大学紀要	６．最初と最後の頁 一―十八
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 西村天囚『論語集釈』と『論語後案』書入れと
３．学会等名 懐徳堂研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 西村天囚の学問と『論語』研究と
３．学会等名 懐徳堂研究会第28回例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 自由民権派の儒者山本梅崖と変法維新派―梅崖の自由観とその経学的根拠―
３．学会等名 国際学術シンポジウム「浙江と東アジア---新史料と新視点」（浙江工商大学東亜語言文化学院主催）　2017年10月29日（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 自由民権の儒学者・山本梅崖と泊園書院
３．学会等名 泊園書院シンポジウム＝第56回泊園記念講座
４．発表年 2016年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 近代日本における釋奠の復興―明治期の儒者藤沢南岳・山本梅崖を例に―
３．学会等名 浙江工商大学東亜語言文化学院 五洲講壇
４．発表年 2016年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 明治期大阪の儒学振興と懐徳堂と
３．学会等名 懐徳堂研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 近代大阪の在野儒学者の経学と活動―山本梅崖について
３．学会等名 浙江工商大学東亜研究院主催シンポジウム「日本における中国文化の摂取と創新」（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 矢羽野隆男
２．発表標題 自由民権の在野儒学者・山本梅崖の『論語私見』について
３．学会等名 名古屋大学・大阪大学中国学研究室交流会
４．発表年 2015年

１．発表者名 呂順長
２．発表標題 王照潜返中国前的異常挙動
３．学会等名 浙江工商大学東亜研究院主催シンポジウム「日本における中国文化の摂取と創新」（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 呂順長
２．発表標題 漢学者山本憲の牛窓移住後の教育活動
３．学会等名 二松学舎大学東アジア学術総合研究所主催シンポジウム「近代東アジアの漢学と教育　一備中倉敷から東アジアの近代教育を考える」（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

１．著者名 吾妻重二	４．発行年 2017年
２．出版社 関西大学出版会	５．総ページ数 235
３．書名 『泊園書院と漢学・大阪・近代日本の水脈』(関西大学東西学術研究所研究叢刊 56)	

１．著者名 矢羽野隆男	４．発行年 2016年
２．出版社 角川学芸出版	５．総ページ数 299
３．書名 大学・中庸(角川ソフィア文庫 ビギナーズ・クラッシックス中国の古典)	

１．著者名 呂順長	４．発行年 2017年
２．出版社 上海交通大学出版社	５．総ページ数 396
３．書名 清末維新派人物致山本憲書札考釈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「誠は天の道なり」 ——『中庸』が教えるもの
https://www.chichi.co.jp/info/chichi/pickup_article/2021/202201_yahano/
「誠」の思想ー『大学』『中庸』
http://www.osaikikj.or.jp/jyukunen/sub130x33x09.htm

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	呂　順長 (Ro Junchou) (40388591)	四天王寺大学・人文社会学部・教授 (34420)	令和28（2016）年度末に削除

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関